

## 令和5年度群馬県立高崎東高等学校2学期終業式式辞

皆さん、こんにちは。令和5年度の2学期が終わります。3学年が揃う終業式はこれが今年度の最後となります。3つの学年が揃うのはあと3学期始業式だけです。始業式に話す内容と、終業式に話す内容は、やはり「始まり」と「終わり」を意識します。言い換えれば、始業式は「これからの決意」、終業式は「これまでの総括」に関連するものとなります。しかし私も来年の3月に役職定年を迎えることになり、こうして皆さんにお話する機会も残り2回となると、決意とか総括とか関係なく、最後だから好きな事を話してしまおう、という気持ちも芽生えてきます。そこで今日は私の趣味というか好きなものについてお話し、そこから考えたこと、思いついたことなどに話を膨らませてみたいと思います。

私は鉄道が好きです。つまり「てっちゃん」です。分類上は「乗り鉄」になります。さらに「乗り鉄」の中でも「ローカル線押し」で、「終着駅押し」です。特に終着駅にはここまで線路を引いたという人間の執念、開通後の賑わったであろう一瞬の時、またはここまでしか線路を敷けなかったという無念さ、近い将来には廃線となるかもしれない寂しさ・哀愁等々、様々な人間ドラマ、地域の抱える問題、鉄道会社の苦悩、などを感じることができません。

例として吾妻線を取り上げましょう。群馬県民でありながらまだ吾妻線の終着駅大前に行ったことがない私は、昨年10月に高崎駅から大前駅まで乗り鉄をしました。新前橋を通る吾妻線の列車は17本ありますが、高崎駅から出る本数は1日9本で、そのうち終着駅の大前駅まで行くのは8:53と18:10の2本のみです。私は8:53に乗りました。その日、私を含めて終点大前駅まで乗った客は3人です。3人とも寂れた駅の風景や線路が行き止まっている所を写真に撮っていました。こんな趣味を持っている人間が一人だけではない、ということを確認することができほっとした気分になりました。しかし「鉄ちゃん」3人と運転士1人、車掌1人の計5人しか大前駅には降り立たないという現実を目の当たりにしたのです。吾妻線大前駅を生活に使っている人はいないということです。この電車が大前駅に着くのは10:41、大前から高崎に帰るには9分後の10:50に乗るか、17:32、20:11に乗るかの3択です。つまり9分後を逃すと7時間待たなければ次の電車がありません。なお大前駅の周りは嬭恋村の役場、もしくは1軒ある釜めしの食堂くらいしか時間をつぶす施設はありません。私はどうしたかという2kmくらい歩くと1駅前の万座鹿沢口駅まで戻れます。この駅は万座温泉へ向かうバス停があったり、近くに嬭恋高校があったりと、大前駅周辺よりは開けています。食事を摂れる場所も複数あります。そこで歩いて万座鹿沢口駅まで戻り、駅周辺で食事をすませ、ついでだからと、ブラタモリでも紹介された鎌原観音堂、(江戸時代の浅間山の噴火の土石流で避難しようとして力尽きた人の骨が発掘されたところ)をお参りして御朱印をもらい、また歩いて夕方の万座鹿沢口駅に戻り、そこを始発とする電車に乗って帰りました。万座鹿沢口駅は大前駅よりも発着本数が多いです。

他にも今年は夏に只見線を経験しました。福島県の会津若松駅と新潟県魚沼市小出駅を結ぶ超ローカル線で秘境線とも呼ばれています。2011年の福島・新潟豪雨で線路が流されましたが、過疎地でしかも豪雪地帯なので乗客数が少なく、採算が取れないということでJR東は復興に予算をかけなかったため、復興費用と今後の運営費用の一部を地元自治体が負担することで11年後の2022年、つまり昨年ようやく全線復旧しました。どのくらい超ローカルかという、新潟県小出駅から出る列車は1日5本で、終点の会津若松駅まで行くのは1日3本です。しかし只見線は日本有数の絶景線路で「乗り鉄」に人気があります。途中の駅で降りて、列車と風景を写真におさめる「撮り鉄」の人が多く乗車するのです。したがって早朝の6時という時間にもかかわらず満席で、立ち客もいました。

車窓を流れる風景を味わい、初めて訪れた土地を散策し現地の食べ物との出会い、「孤独のグルメ」の井之頭五郎さんのように店を探す楽しみ、そして何よりももしかしたら数年後にはこの列車・線路は廃線によって、人口減によって消滅の可能性が高いという現実を改めて認識すると何とも言えない寂しさ、私にとって「乗り鉄」は色々な思い・考えをもたらしてくれます。山手線や湘南新宿ラインに代表される首都圏の黒字線路が、地方の赤字ローカル線を支えている現状、ローカルを逆手にとって観光客の呼び込みにつなげている只見線、脱

炭素社会に向け路面電車を新設した宇都宮市、廃線跡を観光資源にしようとしている安中市の松井田・横川。鉄道を通して世の中を見ると、そこにはたくさんの社会的問題が浮かび上がり、それを解決しようと多くの人々が知恵を出し合い模索を続けています。好きなことを続ける、楽しむということは、究極的には自ら問いを立て、それに向かって解決策を考えていくのかという力を育むと思います。好きな事を楽しむには収入を得なければなりません。どうすれば収入を得て好きなことに使うことができるか、という問いを立てることにつながります。その趣味を続けていくにはどうすればいいのか、とさらに問いは続きます。さらにはそこからまた新しい問いが発生してくるでしょう。自分が好きな事は何か、どうすればそれ続けられるか、この冬休みに考えてみるのもいいと思います。以上です。

令和5年8月29日

群馬県立高崎東高等学校 校長 関口 俊邦